

## 存在とは何か、あるいは問いの発端

菊 地 恵 善

以下の論考は、哲学の難問中の難問の一つである「存在」の問題の研究の端緒をなすべきものである。その研究がどういう形で、どういう方向に向かって展開されるかは、この論考の範囲内においては、全く予想できない。本論考が探究の端緒として正当であるかどうかは、ひとえに後続する研究の歩みによってのみ実証されることである。

### (1) 「存在（ある）」とは何か、という問い

哲学では古来、「存在（ある）」とは何か、が問われている。古代のプラトンやアリストテレス、近世のデカルトやライプニッツ、そして近代のカントやシェリング、そしてヘーゲル、さらには現代のハイデガーやサルトル等々、西洋の哲学の歴史を通覧すれば、「存在（ある）」への問いが哲学的な思索と探究の一つの重要な課題であったことは明らかである。

しかし、である。「存在（ある）」を問う、「存在（ある）」を問題にするということは、一体どういうことなのだろうか。哲学が普通の常識を具えた人間が気にもかけないことを気かけ、問題にもしないことを問題にするとは言っても、哲学の他の問題ならば比較的常識人にも理解してもらえる。例えば、人間の知識が知識として認められる一般的な条件は何か、人間の行為のよさを成り立たせる普遍的な原理は何か、あるいは、自然や芸術作品を見た時に感じる美的な感情が感情という個人的な体験であるにも係わらず、自他の違いを越えて多くの人にたまねく認められるのはどうしてか、など、こうした問いは一般的な形で提起されている点で馴染みがないとは言え、常識人も等しく関心を抱く、あるいは抱くことが十分に期待できるような種類の問題である。ところが、「存在（ある）」という問いはどうか。存在する（ある）を問うということは、当然、あれこれの存在するものを問題にするのではない。それは丁度、知識が正しいと認められる一般的な条件を問うことが、あれこれの具体的な知識を問題にするのではないのと同じである。しかし、「存在（ある）」という問いにおいては、あれこれの存在するものを別にして、あるいはそれらを総括した上で、一体何を知らうとしているのだろうか。

「存在する（ある）」があれこれの存在するものとは違うことはさておき、「存在する（あ

る)」がどういう形で使われるかを問うているのだとしても、その問いはよく分からない。確かに「ある」という言葉は、何かについてその性質や関係を述べる時に使ったり（「この机は木製である」「太郎は花子の兄である」など）、何かが現実そこにあるかどうかを述べる時に使ったり（「机の上に本がある」「駐車場に車が一台ある」など）するが、違った場面に同じ言葉が使われるからといって、その言葉に共通した何かがあると考えられるのか、その何かを求める問いが成り立つのかどうか分からない。

哲学が事実「存在」を問題にしてきたとすれば、それは当然問題にすべき問題であり、実際に問題として探究が積み重ねられてきた以上、その探究に相当するだけの理解が得られているのであろう。しかし、ここでは、問題の特殊性からして慎重にも慎重を期して、いきなり大哲学者の門を叩くのは控えるべきである。学ぶ者が一定の基礎を積んでいなければ、深遠なる洞察も精緻を究めた理論も雲霧に隠れた山岳に等しく、いつ遭難の憂き目に会うか分からない。

そこで、非常に手近な日常的な場面から考察を始めることにしたい。そもそも、私たちが何かを問う時、そこでは一体何が問われているのであろうか。「兼六園はどちらですか」という問いが、ある旅行者から派出所の警官に向かって発せられた場合を考えてみよう。この問いが求めている答え、つまりその旅行者が知りたいと願っていることは、当然、兼六園の方向や距離、歩いた場合の時間やバスやタクシーの便などであろう。そうした説明を得れば、その旅行者は納得するだろう。つまり、ある問いにはそれに相応した答えが期待されているのである。この場合、もし警官が天気の様子や金沢の有名なお店とかについて説明したとすれば、問いを発した旅行者は困惑し、故意にか偶然にか答えをはぐらかした相手に怒りを感じるか、反対に、真顔でそういう応対をしている相手を奇妙で危険な人物と判断し、早々にその場を立ち去るであろう。したがって、問いにふさわしい答えを得ることによって、理解が成立するのである。

以上は問いが直接求めている答えについての理解の側面であったが、問いにはもう一つ別の側面がある。即ち、その問いがなぜ発せられたのかについての理解である。「兼六園はどちらですか」という問いは、その問いに対する答えについては内容が比較的一定しているが、その問いを発する動機や目的に関してはいろいろなことが考えられる。一見旅行者と分かる恰好の人ならば、多くは兼六園を見物するためであろう。あるいは、金沢在住の友人との待ち合わせのためかもしれない。旅行者ではないとすれば、旅行雑誌の記者が取材のために質問するということも考えられる。ともかく、問いはその問いを発した人間の目的や動機を知ることによっても、その問いを問いとして理解することができる。この場合、問いにふさわしい答えがたとえ与えられなくても、問いは問いとして充分理解することができる。「ロミオ、どうしてあなたはロミオなの?」というジュリエットの問いは、何

らかの明確な答えによって消えるものではなく(無論消えるはずもないが)、ただ問いとして理解できるような問いである。

問いは一方でそれにふさわしい一定の答えを求め、他方で、それが問いとして成り立つ理由を求めている。どのような答えがその問いにふさわしい答えであるかは、それが問いとしてどのような理由に基づいて立てられているかということと関係している。私たちが立てる問いは、たいていの場合、最終的には、私たちの生きるという関心に基づいている。天気や地震、事件や事故、あるいは科学的な探究も、私たちが生きるこの世界や、私たち自身に他ならない人間の生の中に最終的な理由を持っている。「明日の天気はどうか」「地震はなぜ起きるのか」「民族紛争はなぜ起きるのか」「人類の起源はどこにあるか」等々、人間の関心によって問いとしての意味が与えられている。もっとも、学問的な問題になればなる程、その問いが人間の直接的な関心から遠ざかり、それを問うことがどのような意味を持つのか直ちに判然としなくなることは周知の通りである。人類や宇宙の起源、あるいは遠い過去の時代の国家組織や社会制度など、日常生活との繋がりの見えない、学問的に重要な問いは枚挙に暇がない。

では、「存在」とは何か、「ある」とはどういうことか、この哲学的な問いが問われる時、この問いはどういう目的や動機に基づいて、つまり、どういう人間的な関心から立てられているのだろうか。どのような答えがこの問いにふさわしい答えとして求められているのかを知るには(果たして、そのような答えが得られるかどうかはともかくとして)、その問いがどういう関心から立てられた問いなのかを知らなければならない。

しかし、ここで私たちはすぐさま困難に逢着する。なぜなら、私たちは普通、「存在」一般について「存在」とは何か、あるいは、「ある」とは総じて一体どういうことなのか、と言った問いを立てないからである。私たちが存在に関して立てる問いと言えば普通せいぜい、「我が家には新車を買うだけのお金があるかどうか」とか、「ガンの特効薬はあるのかどうか」とか、「サッカー日本代表チームはアジア大会で優勝する可能性があるのかどうか」とかいった類のものである。決して端的に、「ある」「存在する」とは何を意味するのかなどとは問わない。実際、誰かがそういう問いを発したとしたら、私たちはその人が一体何を考えてその問いを立てているのか怪訝に思うであろうし、一応まともな問いとして認めたとしても、一体どう答えたらよいか途方に暮れるであろう。それは丁度、「なぜ野菜を食べなければいけないの」とか、「なぜ学校に行かなくちゃいけないの」とかいう子どもの問いに対しては、「野菜を食べなければ元気な身体にならないからよ」とか、「大人になってから困るからよ」とか答えることができて、端的に「なぜ人間は生きているの」とか「何のため人間は生きているの」とかいう問いには答えに窮するようなものである。他のすべての問いが人間の生きていることに最終的な意味を見出せるのに対して、人間の生

きること自体の意味が何か、その意味を一体どこに求めたらよいのか、これは皆目分からないのである。どうしても答えようとすれば、「生きているから生きているのだ」と同語反復的に答えるより他ない。「ある」に関して事情は同じである。「ある」一般の意味をさらにどこかに求めようとしても、「ある」は「ある」としか答えられそうにもない。

「存在」とは何か、「ある」とはどういうことなのか、この問いはどうして立てられたのか、何のために立てられたのか、常識の範囲内では到底理解できない。それでは、存在への問いは無意味な問いということになるのか。問いがそもそも無意味な問いであるならば、その問いの答えを一生懸命探しても無駄だということになる。これは重大な論点である。存在への問いに意味があるのかどうかによって、存在の探究の道は次の4通り考えられることになる。

- ①問いは有意義であり、一定の答えがある。
- ②問いは有意義であるが、一定の答えは得られない。
- ③問いは無意味であるが、(答えはないという)一定の答えはある。
- ④問いは無意味であり、何の答えもない。

第1と第2の可能性は、哲学的な探究の存在理由を与える。これに対して、最後の第4の可能性は、問いの段階で問いとしての有効性を否定し、その後の探究に何ら携わることなしに答えを断念するものである。存在への問いが問いとして有効であるかどうか、正にその後の哲学的探究の正当性を決めるのであるから、問いの有効性如何は、当然、それとして議論される必要がある。しかし、その前に第3の可能性を見ておかなければならない。これは、このままでは不自然な印象を与える。問いが無意味なのに、一定の答えがあるとは考えられないからである。そこで、この第3の可能性を分かりやすく言い換えると、存在への問いには一定の答えはないから、問いとして無意味なのだ、と主張する立場である。即ち、この池には魚がいないことが明らかだから、釣り糸を垂らして釣ろうとしても無駄だという意見である。この立場は問いが問いとして無意味であることを積極的に主張している点で、単なる無関心に留まり、思考を停止し探究を放棄している第4の可能性よりもはるかに重要であり、当然吟味されなければならない主張である。

そこで、存在への問いが問いとして意味があるかどうか、という重大な論点を取り上げる前に、その問いの有効性を積極的に否定する第3の可能性を先に吟味しておくことにする。問いに対する一定の答えがないということは、その問いがそもそも意味がないということの理由にもなると同時に、その判定が通常理解の基準からしてなされているとすれば、全く正反対に、通常理解の基準からは答えが期待できないような問いも問いとしては充分成り立つ可能性を認める理由ともなる。したがって、存在への問いにどのような答えがありえるのかを予め検討してみることは、存在への問いが問いとして一つの有効な問

いであるかどうかを考える手掛かりになるはずであるし、また、その問いの答えがどういう性格のものであるかを裏返しで見ることになるはずである。

存在への問いは何らかの答えを求めている。何らかの答えを得ることによって疑問や質問が解消することを、私たちは普通「理解」と呼んでいる。存在への問いがどういう問いとして立てられているかを知らない段階では、私たちはその問いにふさわしい答えが一体どういう答えなのか、そして、その答えが果たして得られるものかどうか知らない。存在に関して新たにどういう理解が得られるのかが直接分からないのだとすれば、反対に、そもそも「理解する」とはどういうことか、という方向から考えてみるより以外に道はない。

## (2) 理解する(分かる)とはどういうことか

私たちが何事かを理解した、つまり、それが分かったと言うのは、どういう時であろうか。いくつかの例に即して見てみることにしよう。

### ①還元

まず、初めて聞いた意味の分からない言葉を理解する場合である。「グレープフルーツ」(名詞)、「暫定的」(副詞)、「挫折する」(動詞)と言った言葉を知らなかった人は、その言葉の意味をどのようにして理解するのだろうか。今でこそありふれた果物である「グレープフルーツ」も、まだ輸入量が少なかった時代には、小説の中に出てくる言葉としてしか知られていなかったそうである。この果物を葡萄の一種であるかのように思いこんでいた理解が誤りであることは、実物を見ることによって容易に知られる。この場合の言葉の理解とは、それがその名前であるところの実物を見ることによって成り立つ。

では、「暫定的」という言葉を教科書の中に見つけた生徒は、どのようにしてその言葉を理解するのだろうか。辞書を調べて、その説明、例えば「決定を見合わせて、その間、仮に一時的な取決めをすること」という説明を読んで、どういう様子を言い表す表現であるかを理解する。この場合、語句の説明に出てくる字句表現は、もとの語句よりもより基本的で、理解し易いものでなければならないことは、言うまでもない。「決定」とか「取決め」、あるいは「仮に」とか「一時的」という語句がまたしても理解できなければ、さらにそれを辞書によって確かめる必要がある。いずれにせよ、辞書的な説明によって未知の言葉を理解するというのは、より基本的な言葉に還元し翻訳することに他ならない。

この点では、「挫折する」についても事情は同じである。仕事や事業が「挫折する」というのは、子どもにとっては理解できない抽象的な事態を表す表現である。しかし、仕事や事業について使われる「挫折する」という言葉は、元を正せば、「くじけ折れること」であ

る。本来足や腕が折れることを意味した言葉が、事業や仕事が途中で上手く進行しなくなった場合に類比的に転用されて、それらについても「挫折する」と言うようになったのであろう。したがってこの場合も、難解な言葉は、より基本的な言葉に還元し翻訳することによって理解されるのである。

## ②理由

私たちが知りたいと思う事柄には、また別の種類のものがある。つまり、なぜ月は地球に落ちないのか、なぜ人間は死ぬのか、なぜ悪いことをすると警察に捕まるのか、といった類の事柄である。これらの問いは、幼い子どもがよく発するものであり、答えを既に知っている大人は、そこに子どもらしい無邪気さを感じて、そうした問いを余裕の微笑を以て聞き入れる。そこで大人は普通こう答える。月は地球の回りを回っているのだが、月には「遠心力」という力が働き、また、月と地球の間には「引力」という力が働いている、その2つの力がバランスをとっているのです、月は地球に落ちて来ないんだよ。それは丁度、水を入れたバケツをぐるぐる回しても水がこぼれないのと同じさ。

次の問い、なぜ人間は死ぬのか、については、大人はこう答えるだろう。昆虫や動物、そして人間などの誕生と死を見せ、生き物が生まれ成長し、子孫を残しては、やがてすべて洩れなく死に至ること、生き物は一般に子孫を残すことによって種としての生命を存続させながら、個々の個体としては限られた時間の間だけしか生きられないのだ、と。

以上の2つの例は自然界の出来事であったが、3番目の問いである、犯罪と警察との関係についての問いについては、どのように説明すれば子どもは理解するだろうか。人間は共同生活を営むこと、だから、個人が他の個人に対してよくないことをした場合、これを放置すれば共同体の秩序ある統一が失われかねないこと、したがって、共同体全体という公的な立場から個人の不正を排除する必要があること、こうしたことを大人は説明するだろう。さらに、共同体が大きくなると、不正を犯した個人を別の個人が個人として排除したり防止したりすることが困難になるから、その仕事に専門に携わる人たち、つまり、警官が必要なのだ、こう付け加えるかもしれない。このような説明で、たいていの子どもは理解できるだろう。

自然界の出来事にせよ、あるいは社会の中の出来事にせよ、こうした出来事についての理解とは、普遍的な原理（引力や遠心力など）や一般的な法則（生命のサイクルや水の3態など）、あるいは規則や制度（交通規則や警察制度など）、こうしたある普遍性や全体性の中に個々の事例を位置付けることだと言える。

## ③原因

ある個別的な事例をより広い範囲の、一般的な現象に汎通した法則的な出来事の1例と

考えることが、前に述べた理由を知ることによる理解であったが、これとは反対に、個別的事例をその個別性において理解しようとすることもある。つまり、個々の出来事や行為がなぜ生じたのかを問う場合である。

例えば、部屋の電灯が突然消えた時、私たちはどうしたのだろうかと思ひ、なぜ電灯が消えたのかを問う。また、ある知り合いが引っ越しをした時、なぜ引っ越ししたのかを知ろうとする。これらの場合は、送電や配電システムや電気器具の構造を知りたいのではなく、また、日本憲法では住所を移転する自由が権利として認められていることを知りたいのではない。そうではなくて、この部屋の電灯がなぜ消えたのか、あの人やなぜ引っ越ししたのかを知りたいのである。そこで、前者については、近くの電線に突風や落雷による断線とかがないか、家庭内のブレーカーが下りていないか、あるいは電灯が切れていないかなどが確かめられ、消灯の原因が特定された段階で、なぜこの電灯が突然消えたかを私たちは理解することになる。つまり、この特定の出来事を引き起こした何らかの原因を特定することが、その出来事を理解したことになるのである。この点では、後者の例でも同じである。知り合いが引っ越ししたのは、勤務先が変わったためなのか、住居が手狭になったためなのか、それとも周囲の環境が悪くなったためなのか等々、私たちは特定の理由を手に入れた時点で、その引っ越しを理解するのである。

こうした個別的事例をその個別性において理解しようとするとき、その理解の根拠として求められているのは、因果的な原因や心理的な動機などであるが、それらの原因や動機は特定のものでなければならない。泣いている子どもに向かって、なぜ泣いているのと聞く。すると子どもは答える、蜂に刺されたの。あるいは、友達にいじめられたの。あるいは、鉄棒から落ちたの。いずれにせよ、原因が特定されて初めて、私たちは、その子がなぜ泣いているのか理解するのである。

これに反して、もし、ある出来事に対して、それとは一切無関係の、しかも特定のものではないきわめて一般的な事柄が、その出来事の生じた原因として挙げられたとしたら、私たちはその出来事を全く理解できないだろう。殺人者にその動機を聞く、なぜお前は人を殺したのだ。すると彼は答える、太陽が眩しかったからだ（カミュ『異邦人』）。この答えに私たちは啞然とし、慄然とする。なぜ啞然とするのかと言えば、殺人という重大な出来事に対して、それに見合うだけの特定の理由が与えられないからである。そしてさらに、なぜ慄然とするのかと言えば、殺人という重大な出来事が、太陽が眩しいという何気ない一般的な事実と同列に置かれることによって、その重大性が奪われてしまうからである。人間の死に特別な意味を認めないということは、人間の生にも特別な意味を認めないということである。生の意味を信じて疑わない人、あるいは、信じていると思ひ込んでいる人、そしてまた、信じているふりをしていてと薄々感じている人は、そこで冷水を浴びせられるのだ。

既に述べたところからすれば、出来事理解には、一般性に向かうものと個別性に向かうものがあることになるが、両者は密接に関係していることもあれば、別々に切り離して考えられることもある。例えば、病気を診断する医者は、病気一般の発生の原因と症状の特徴を知っていなければならないが、個々の患者の診断においてはその特定の患者の病気を原因や症状から特定しなければならない。あるいは、殺人犯に対して判決を下す裁判官は、犯罪の種類と刑罰の程度に関する体系的な知識、つまり法律知識を理解し、そしてまた、人間の行動の目的や動機に関する広い理解力を持っていないといけないが、ある特定の犯罪者に判決を下す時には、その犯罪を成り立たせた特定の事情を考慮に入れなければならないのである。

#### ④体得

「分かった」というのには、知識として頭で理解することの他に、技術として体で理解するということもある。例えば、水泳やスキーのようなスポーツ技術の練習の場合や、料理や自動車運転の技術の習得の場合、それらの技術を理解するというのは、それぞれの種類の動作において、どうすればよいのか分かること、自分の体を使って同じことができるようになることである。こうした場面での理解の達成は、まさしく的確に「身に付いた」という表現で言われる。

「身に付いた」という形で理解が達成されるのは、しかし、体を使った技術的な動作についてだけ言われる訳ではない。同じく技術的な種類の事柄であれば、より知性的な動作に関しても言われることがある。それは例えば、外国語の会話や楽器の演奏、そして算術の計算などの場合である。これらの技術は一方で知性的な判断と操作を必要としながらも、他方で、反復練習を通じて一々知性的な努力を介在させずに実行できる程度に身体的な動作になることが求められる。最初の外国語会話の例について見れば、文法書や辞書はもとより語学の学習に必要なではあるが、会話においては一々文法書や辞書を参照するわけにはいかず、そうした知識を会話の中に有機的に統合していく身体的な技術が目指されているのである。

この体得という意味での理解に特徴的なことは、勿論一つには、今まで出来なかったことが自分の体を使って同じようにできるようになるということにあるが、もう一つ、より特徴的なことは、状況や場面に応じて臨機応変に基本的な動作を応用していくことができるということであろう。ものの値段を尋ねることしかできない会話とか、1桁の足し算しかできない計算能力とかでは、技術を十分に体得しているとは言えない。ある程度臨機応変に技術を使うことのできる能力に達してのみ、「身に付いた」と言われるのである。

この種類の理解は、こうして、基本的な動作を「身に付ける」ことであると同時に、その基本的な動作を状況に応じて応用していくことを「身に付ける」ことでもある。この基本



と応用の関係には無限とも言える多様な展開があり、そこに人間の高度な「理解」能力を認めることができる。例えば、自動車の運転を見ると、確かに、基本的な運転技術は一定の内容で尽くされる。がしかし、一度実際の運転を始めれば分かるように、自動車の走る場面には一度として同じ状況はないのである。

こうした無限とも言える应用能力を必要とする体を通じての「理解」は、では人間に固有のものなのであろうか。ここに、最先端の科学技術が哲学に突きつけている重要な問題の一つ、理解する能力、即ち知能は、私たち人間と人工的な機械とではどこが異なるのか、という問題が提起されてくる。熟練した技術を持った職人と同等に、あるいは、それ以上の精確さと速さにおいて製品を加工する工業用ロボットは、果たして「理解」を持っているのであろうか。そしてまた、並みの人間の能力をはるかに越えた高度な事務処理能力を発揮するコンピュータは、果たして「理解」を持っているのであろうか。この問題は、この論考の範囲外の問題なので、ここではこれ以上論じない。ただ、理解ということの中には、単に知性による理解ばかりではなく、身体的な動作に深く関係した理解もあるということ、そして、この理解は、基本の型や規則の習得として一度切りで終わるものではなく、むしろより本質的には、その基本の型や規則を多様な状況にうまく応用していく能力としてのみ保持されるものであること、これだけは確認しておこう。

#### ⑤把握

「理解する」「分かる」ということには、さまざまな種類がある。頭で理解することもあるれば、体で分かることもある。ある時点で達成されたと見なされる理解もあれば、いつでもできる、つまり、繰り返し実行できることをもって初めて獲得されたと見なされる理解もある。しかし、これまでのものよりもさらに一層「理解」という言葉の核心を成すような種類の「理解」が残されている。それは、映画や小説、絵画や音楽などに触れた時に発せられる、あの「分かった！」のことである。

この「分かった！」の成り立ちを、例に即して見てみることにしよう。ある映画を見ている時、その映画がストーリーの点で劇的な展開もなく、また人物と場面の描写の間に有機的な関係がないように見える場合には、私たちは次々と異なったシーンを見せられながら、それらの間の関係が見えずに、退屈と苛立ちを覚える。そこで今度は、この映画はストーリーの展開をねらったものではなく、現実を多面的に淡々と描写することに主眼があるのだらうと予想し、無理に場面と場面間の関係を結び付けずに見ることにする。そうすると今度は、次々と連続して現れる場面が、ストーリーではないとすればどういふ焦点に向かって収斂していくかを何とか掴まえようとして、あせりともどかしさを感じる。ところが、その求めていた焦点が忽然として立ち現れる瞬間が訪れる。あれ程流れていながら少しも流れない不可解な映画が何の無理もなくつながってきて一つの有機的な全体とし

て見えてくる瞬間が訪れる。その時、私たちは「分かった！」という喜びの声を上げる。それは丁度、最近流行した三次元図像が立体的に見えてきた瞬間のようである。部分々々を見ていただけでは見えなかった関係が、ある視点を獲得した瞬間に一つの全体として現れてくる経験である。

この理解とは、言わば一つの視点を獲得することによってある対象を有機的な全体として見渡すことであり、掴み所のなかった不確かな相手を自分の手の中に掴みとることである。理解することをまた「把握する (begreifen)」と言うのは、この点からすれば非常に納得の行くことである。いくら説明の言葉を聞かされても、理解できないものは理解できない。他人がする説明は、その人自身の理解に基づいている。自分が理解するには、自分の手で掴みとらなければならないのだ。

部分を一々ただ追っていただけでは見えてこないし、かと言って予め全体を全体として見渡せる視点が与えられてもいない。そこで、部分を追いながらも、それらのある全体にまとめる視点を探していく作業が求められる。全体を見渡す視点は個々の部分からは見えてこない。だから、隠れた視点に向かって飛躍がなされなければならない。多くの芸術作品はこの隠れた視点を暗示しているのであり、その芸術作品を楽しむとは、その隠れた視点から、その芸術家が見たであろう世界と同じ世界を自らも見ることである。芸術作品の背後に隠された視点が鑑賞者に共有されない限り、その作品は理解されないままに留まる。印象派という名前の起源として有名なモネの絵「印象一日の出」(1872)が、当時のある新聞記者の目にはただの下手な絵としてしか見られなかったこと、これは今となっては滑稽な逸話である。がしかし、評価の定まった過去の作品、つまり隠された視点を多くの人が共有することによって一定のものとして見られるに至った作品ではなく、今現在の作品について考えてみれば、この逸話も決して他人事として笑ってはいられない。

モネの絵ばかりではなく、総じて芸術作品は発見されなければならない。しかも一度ならず、その度毎に。モーツァルトのオペラ『魔笛 (Die Zauberflöte)』は、音楽の素晴らしさは別にして、第1幕と第2幕との不自然なつながりを真剣に考えた場合、一つの全体として一体何を指し示しているのであろうか。フェリーニの映画『8 1/2』は、非現実的なシーンを積み重ねていって、最後には出演した役者総出のカーニヴァル的大騒ぎになるが、一体何を表現しようとしているのか。あるいはまた、マンの長大な小説『魔の山 (Der Zauberberg)』は、相対立する思想の間で展開される退屈な議論がその全てではないとすれば、そうした議論と葛藤を含んだ小説世界とは一体どういう世界なのだろうか。

芸術作品は、それを一つの全体として理解できるような地点へと私たちを仕向ける誘惑に満ちている。芸術作品の魅力とは、鑑賞によって得られる快感、ただのきれいさや美しさではない。むしろ、危険な誘惑なのである。なぜなら、ある隠された視点へ向かって跳躍すること、これは自分の見慣れた視点から身を引き離すこととして脱我的な超越であり、

新たな視点からの新たな世界の現れに立ち会うこととして危険な賭だからである。

相手を一掴みできる全体として我が物にすること、あるいは現実を見る新たな視点を獲得すること、こういう意味での理解は、芸術作品について成り立つばかりではない。哲学や宗教について言われる理解も、多くがこの意味での理解を指している。哲学や宗教を理解するというのは、ただ単に、その内容を他人に言葉で説明できるということではなく、むしろ本質的には、その視点に従って現実の世界を見ること、あるいは、その見られた世界の中で生きることである。哲学は理論ではないし、宗教は思想ではないのだ。

#### ⑥要約

理解にはいろいろなタイプがあることを見てきたが、最後に、私たちは自らの理解を最終的にどのように確認するのかという論点が残っているように思われる。与えられた文章の意味、議論されている問題の論点、他人の考えや感情、小説や映画などの作品、これらについて私たちは自分の理解をどのようにして獲得し、その獲得した理解の正しさをどのようにして確認するのだろうか。

例えば、新聞の記事である。例の悪魔君命名問題で、出生届を受けた昭島市からの相談に対して東京法務局八王子支局が与えた判断、即ち「悪魔は人名の持つ概念から著しく逸脱しており、子供が差別を受けることが想像され、子どもの利益を守る立場から妥当ではない」という文章を、私たちはどういう風にして理解するだろうか。法律言葉や文章言葉に慣れていない人は、この記事を読んで直ちにすんなりと趣旨を読みとるわけにはいかずに、それをもっと分かりやすい平易な言葉に言い換えてみるのではないだろうか。つまり、一種の翻訳をするのではないだろうか。「悪魔という名前は普通の人が付けないような名前だ。そうした名前だと、その子どもはその名前のせいで嫌がらせをされたり、いじめられたりするかもしれない。だから、その子どもがそうした嫌な目に会わないためにも、悪魔といった名前を付けるのはよくない。」こう翻訳して初めて、しっかりと文章が理解できた感じがするのではないだろうか。より分かり易い言葉に、しかもできるだけ自分の使い慣れた言葉に自分で言い換えてみることで、これが理解した、しかも自分が理解できたという実感を与えるのである。

ある事柄の理解が「自分の」言葉への翻訳に他ならないこと、これは他の例について見てみればより一層はっきりする。ある議題についての討論の場で意見を述べる時、私たちは、要するに問題なのはかくかくしかじかの点にあり、それについてはこう考えるという風に、一度問題の核心を自分の言葉に言い換えて要約し、事柄の輪郭を明確にする手続きを踏むのが普通である。それによって、問題についての自分の理解を確認し、同時に、その問題に対して自分がどういう見方をしているか、自分にも他者にも提示するのである。

自分の言葉に翻訳し要約して理解するというのは、何か複雑で抽象的な問題を理解する

ような時ばかりではなく、具体的な人間を相手に、その人の考えや感情を理解しようとする時も行われる。考えていることが抽象的であればある程、また、感じていることが微妙であればある程、私たちは自分でそれを的確に相手に説明できるわけではないし、反対に、自分が聞き手になった場合、そうした種類の相手の話を一度で十分に理解できるわけでもない。そこでどうするか。あなたの言いたいことはこういうことではないですか、とか、君はこういう風を感じただね、とか、自分の言葉で相手の考えや感情を表現してみて、それを当の相手に投げかけ、正しいかどうか判断を仰ぐのである。このようなコミュニケーションの現場を見れば明らかなように、私たちは自分の理解を最終的には、与えられた内容を自分の言葉で表現してみることによって確認し、理解を達成するのである。つまり、理解とは本質的に言葉による理解なのである。

言語的に表現されている知識は当然、言葉の説明によって理解が得られる。しかし、本来言語的な活動ではないもの、例えばスポーツや料理についても、あるいはまた、全く言語的な形態をとらない対象、例えば音楽や絵画についても、私たちは言葉によって理解を説明しようとし、言葉によって理解を確認しようとする。何についても私たち人間は、ともかく語らずにはいられない。何かを言葉で表現することは、その不確かな対象を明確な輪郭において捉えることであり、言葉に表現して得られる理解は、その対象を自分の精神の中に位置付けることである。言葉は相手を捉えることであると同時に、自分自身を捉えることでもあるのだ。

理解とは自分の言葉に言い換えることだということは、元の理解されるべきものからすれば、言わば一種の翻訳であり、変奏だということになる。つまり、理解とは、基本的に、変化や歪曲、逸脱や切断などを拒否できないということになる。例えば、ある文章を一字一句間違わずに同語反復することは、それを理解している証拠にはならない。その文章が何を言っているか、自分の言葉に言い換えてみることによって初めて理解していることが確認されるのである。注釈や翻訳、分析や批評、要約や解説は、理解の本質に根差した活動形態である。デカルトの言葉「われ思う、故にわれあり」も、ニーチェの言葉「神は死んだ」も、夥しく多様に理解されているが、理解が本質的に翻訳であり変奏であることからすれば、至極当然のことである。

### (3) 「存在 (ある)」を理解すること

前節では「理解」ということが語られるさまざまな場面を取り上げ、それぞれの場面で理解がどういう風にして達成されるかを見てみた。そこで今度は、「存在 (ある)」について、以上のような形での理解が得られるのかどうか検討することにしたい。

「理解」が成立する条件は、各タイプでそれぞれ次のようであった。

- ①還元：基本的なもの、具体的なものに遡及すること。
- ②理由：原理や法則や制度など一般的なものの中に位置付けること。
- ③原因：事実や行為の因果関係を認識すること。
- ④体得：ある身体的な活動をする能力を獲得すること。
- ⑤把握：1つの全体として見ること。
- ⑥翻訳：自分の言葉に言い換えること。

### 検討①

まず初めに、複雑であったり抽象的であったりして難解な言葉は、基本的な言葉や具体的な状況に遡及して、そこから転用や派生の過程として分析的に理解される点を取り上げよう。「存在（ある）」についてもそのような理解は果たして可能だろうか。

「ある」ということが語られる最も具体的な場面、そして「ある」という言葉の最も基本的な意味が成立する場面は、「この部屋に机がある」「その机は木製である」とか、「植物の葉には葉緑素がある」「三角形の内角の和は2直角である」とか言われる場合であろう。「ある」とは普通一般に、これらの場合について見る限り、何らかのものが人間に対して感覚や思考を通じて与えられていることか（「がある」）、あるいは、何らかのものについて、その状態や性質や関係などを述べること（「である」「にある」）である。この基本的な意味さえ見失わなければ、「ある」の適用される殆どの場合において私たちは混乱に陥ることはない。自然現象の報告や科学的な知識の説明、あるいは社会生活の運営などにおいて、「ある」が理解できないということはない。「被告には責任能力がある」「昔男ありけり」「素数とは、1とそれ自身以外の数で割り切れない正の整数である」「地震が起きる理由の一つは、プレートの潜り込みによって生じる地殻の歪みの反動にある」等々、私たちは経験の範囲の拡大に応じて「ある」を多様な場面に応用していくが、その意味を誤ることはない。

そこで問題なのは、私たちが「ある」を理解できないということではなく、むしろ反対に、普通の日常生活においてよく理解しており、そこには格別議論すべき難点はないということである。

### 検討②

「ある」について格別問題はないとする常識的な立場からすれば、「ある」の意味が問われる場合、そこでどのような理解が求められているのかがそもそも全く理解できないことになる。「ある」が問題だとして、それについて普通一般の理解は成り立つのだろうか。次に、物事を普遍的なもの、一般的なものの中に位置付ける理解について見てみよう。すると、「ある」についての理解を哲学者がこうした意味において求めていたことが容易に窺える。「(が) ある」と言われるものの中で、究極の意味において「(が) ある」と言われるも

のは何かという形で、存在の意味を問う場合には、存在は最初に存在するもの、即ち原理という意味で問われているのである。あるいはまた、何か「(が) ある」と語られるのは、その何か人間に対してどう現れる時か、その一般的な基準は何かと問われることもある。これに対して、「あるとは感覚されることである」とか「あると考えるとは同じである」とか答えられる。この場合には、「ある」の最も基本的な意味が、一般的な基準や法則という形で問われているのである。

上の2つの問い方は、「ある」という言葉の最も基本的な意味を探求し確定しようとする狙いを持つが、これとは反対に、多くの人々が一般に認めているものが「ある」ということだ、という形で問いに答えることも出来る。「神」「悪魔」「フロギストン」「エーテル」「人権」とかの存在は、何処か具体的な場面を手掛かりに人間の間合意が得られるものではない。だとすれば、「ある」と言われるもののあり方には、初めに遡ることによっても、また、一般的な基準に照らしても、それを確かめられない種類のものもあると考えられなければならない。つまり、物語や理論や制度とかいった一定の枠組みの中で認められているものという意味での「ある」があるのだ。こうした仕方では理解できない「ある」があることは、誰も認めるだろう。

存在の意味への問いは、その基本的な意味を原理や基準や枠組みという形で答えることができる。しかし、同時に認めなければならないのは、その解答のどれかで全ての意味を残る限なく覆いきれないということである。

最初に存在するものを原理として求めたとしても、その原理から合成されたものの存在は原理そのものと存在の資格を異にする。例えば、水が酸素と水素という原子から成るとしても、私たちが飲むのは原子ではなく水である。存在の資格を整合的に説明しようとするれば、存在と現象、実体と仮象、本質と属性とかいった言葉を導入し、再び「ある」の意味を多様化しなければならなくなる。あるいは、「ある」の意味を感覚や思考と等置するとすると、感覚には錯覚があり、思考には想像があり、その等式自体が再び注釈や説明を要することになる。こうした困難は、理論や常識の枠組みの中に「ある」の意味を取り込もうとする理解についても当然避けられない。「神」があると考える社会と考えない社会とは、相互に没交渉な別々の社会として切り離されて存在しているわけではない。「ある」を一定の枠組みの中に位置付けて「ある」の多義性を救おうとすると、今度は、人間の生きる社会をそれだけ多く想定しなければならなくなる。社会や時代、理論や常識をそれぞれ孤立した枠組みと考えれば、確かに「ある」を一定の意味として確定する難問から免れることはできるが、逆に、「ある」についての議論が成り立つ限りにおいて認められるべき、「ある」に共通した一定の意味が見失われてしまう。

「ある」はただ単に多義的なのだろうか。それとも、それらに共通したある一定不変の意味を持っているのであろうか。はたまた、多でも1でもなく、それらは何がしかの点に

において相互に類似していると言った、ゆるやかなつながりを持っているのだろうか。

### 検討③

原因による理解は、「ある」の意味への問いについても有効である。私が存在すること、体格や性格や能力や家族などの点において私がかくかくの条件においてあること、この事実を始めとして、私の生きている世界がこのようなものとしてあることに至るまで、現実の世界がこうした現実としてあるという事実は、人間の理解の範囲を越えている。事実が人間の理解を越えるというのは、2つの意味においてである。1つは、人間の知識が事実の広大な範囲に到達することが不可能だということであり、もう1つは、人間の知識は本質的に事実についての知識であって、事実がある特定の内容としてあることには関与できないということである。

事実を前にしたこうした人間の知識の限界は、こちら人間の側からは越えられない。そこで、人間の無知の補完物として求められるのが、この世界をこの世界として意志し創造した究極の原因、絶対者である。神話や宗教や哲学において語られる絶対者は、「ある」の究極の根拠を与えるものである。事実の地平において原因の系列を辿っても人間の知識は究極の原因に到達することはありえない。例えば、私の原因を物質の原因の系列で探求しても、また、両親からそのまた両親へ、人間から人類の祖先へと生物進化の系列を探求しても、その最後の所で、それが他のようにではなく、正にこのようにしてあるのはなぜかと問い得るであろう。そこで、「ある」という事実の根拠を求める問いは、事実の地平においてではなく、その上空にか根底にか、いずれにせよ垂直方向に求められることになる。天にまします神か、底の底なる無底の暗い意志か、どのような根拠が考えられるにせよ、その根拠にはそれ以上の根拠はありえない。

事実の根拠として絶対者を認める考えは、「ある」を究極の原因によって理解しようとする試みである。しかし、この試みにおいて問題となるのは、その絶対者についてもまた、それが他のものではなく正にそのものであるのはなぜかという問いかけを免れえないことである。もしその問いかけに答えるとするれば、それは自らを人間に啓示しうる絶対者のみである。啓示という事実あるいは信仰がなければ、絶対者もまた事実の一つに転落する。神々をめぐる人間の争いが地上に絶えないのは、事実の根拠を与える神が再び事実の地平において語られざるをえないからである。

「ある」の原因は「ある」のだろうか、この奇妙な問いが根拠を求める冒険家を待ち受けている。

### 検討④

「ある」の意味や根拠を尋ねること、しかも、それを一義的に確定することにはいろいろ

ろな困難が伴う。そこで、次のような考えが出てくる。「ある」は言葉によって探究されるべきものではなく、したがって、そこにはそれ以上解明されるべき何ものもない。「ある」ということは、ただ与えられた事実としてだけ理解されるべきである。この考えによれば、存在の意味への問いは無意味な問い、その探究はただの徒労、要するに、言葉が生み出した虚妄の問題ということになる。

「ある」を与えられた事実として受け入れること、この態度は「(が) (で) あるかあらぬか」の問いに答えることを一切拒否するものである。問いに答えるのではなく、答えられない問いは無意味だとして問いそのものを消去すること、これはもはや探究ではなく、一つの生き方である。ところで、一切の判断を留保すること、あるいは、合掌瞑目して一切の動揺を去ること、これは消極的で虚弱な生き方であるところか、堅固な意志を必要とする積極的な生き方である。なぜなら、「ある」を問うことが無意味な問いだとすれば、自分があることも、自分の人生がかくあることについても、その意味を問おうとしない覚悟、つまり、意味がないという意味で無意味だということに絶えなければならない、堅忍不拔の意志が求められるからである(仏教のニヒリズム、あるいは、鷗外の言う *résignation*)。「ある」に格別意味がないように、人生も無意味である。生きるとはしたがって、それ自体無意味である人生を有意味にすることではない、無意味な人生を無意味なものとして受け入れることなのだ、ある詩人はこう語っている。この警句通りに、果たして私たちは人生を達観して生きることができるだろうか。

存在への問いは無意味な問いとして一度飛び越えられてしまえば、それで消えてしまうような問いなのだろうか。「ある」は問うべきものではなく認めるべきものなのだ、一旦事実として受け入れれば後は確固とした事実の世界が存続するのだ。「ある」の背後にも「ある」の手前にも何も隠されてはいない、たとえ何かが「ある」としても、再び「ある」に帰るだけであるから、最初から「ある」を認めて生きていけばよい、それが「ある」について言われるべきことの全てだ。「ある」についてあれこれ考えるのを止めた時から「生きる」ことが始まるのだ。――

存在への問いを生きることの中で答えようとすれば、「ある」の探究が「ある」の内容を変えない限り、「ある」は「ある」としてだけ認めて生きればよいということにならざるを得ないであろう。それは丁度、包丁の使い方についての説明が、一旦包丁を上手く使えるようになった段階で無用になるようなものである。「ある」を問うということは果たして、技術の体得によって不用になる説明のようなものなのだろうか。「ある」について考えることは、「ある」を少しも変えないのであろうか。

#### 検討⑤

事柄を一つの全体として把握することによる理解は、「ある」に関して成り立つだろうか。



もし「ある」の全体的な把握が成り立つとすれば、「ある」は何らかの意味で一つのまとまりをもった全体でなければならないはずであるが、果たして「ある」はそうしたものであるだろうか。

ところで、ある事柄の全体的な把握には、どうした種類のものがあり得るだろうか。主なものとして、少なくとも3種類をあげることができる。第1に、概念による把握、第2に、直観による把握、そして第3に、図形や記号などの象徴による把握である。

第1の概念による把握とは、言葉による定義的な説明に基づく理解である。例えば、「三角形」を「3つの直線で囲まれた平面図形」という辞書的な定義によって理解することである。この定義的な説明によって、どんな形の三角形が現れようと、それらを全て三角形として理解することが可能になる。可能な三角形の全てが具体的に与えられなくても、三角形なるものの全体を把握することが成り立つのである。

次の直観による把握とは、言葉による分析的な定義、つまり「3」とか「直線」とか「図形」とかのより基本的な概念に分解して得られる定義を待たずに、しかもあらゆる可能な三角形の全てを見ることなしに、「三角形」を一挙に全体として把握する仕方である。実際、「3」とか「直線」とか「図形」とかの言葉を知らない幼児も、2つか3つ具体的に三角形が例示されれば、比較的容易に「三角形」を「円」や「四角」から区別することができるようになる。勿論、この直観的な把握は、デカルトが指摘しているように、複雑で抽象的な事柄の理解には向かない。「三角形」と「円」なら言葉なしで区別できても、「三角形」と「三角柱」と「三角錐」との区別となると、言葉による分析的な説明が必要になるだろう。さらには、元来直観的には与えられない対象になると、言葉なしで理解することは殆ど不可能になる。例えば、「民族」とか「正義」とかいった概念は、どのようにしても直観することはできない。

最後の象徴による把握は、非常に一般的に行われている理解の仕方である。先の例で言えば、「三角形」を図形「 $\Delta$ 」で示し、この典型的な例でもってあらゆる可能な三角形の全体を理解することである。正三角形も二等辺三角形も鋭角三角形も鈍角三角形も、あるいは、大きな三角形も小さな三角形も、あるいは、その三角形の内部がどのような色をしていようとどんな三角形も、すべてこれらの三角形を「 $\Delta$ 」という1つの代表的な図形によって理解することができる。象徴の種類は多様である。国家に対する国旗、平和に対する鳩、オリンピックに対する五輪のマーク、会社や学校や家族に対する紋章などばかりではない。「?」「!」「○」「×」もそうであろう。また、漢字のうち特に象形文字は、「山」や「川」などを見れば分かるように、概念であると同時に象徴でもある。因みに、書が芸術となりうるのは、漢字がアルファベットのような表音文字ではなく、象徴的な記号であるからである。

さて、ある事柄を一つの全体として把握する理解の仕方は、「ある」についても成り立つ

だろうか。「ある」は、言葉によって分析的に定義されるような複合的なものなのだろうか。あるいは、「ある」は、言葉による説明的な理解なしで、直観的に知られるような種類のものなのだろうか。その場合、そこで直観されるのは何なのだろうか。あるいはさらに、「ある」は1つの物や図形や記号によって代表されうるのだろうか。例えば、黒い石板とか、曼陀羅図とか、「ヨ」（存在量子）とか。

#### 検討⑥

「ある」が何らかの形で一つのものとして表現され、その表現物を通じて「ある」が理解されたとしても、私たちは自分の理解を確認するためには、その理解の内容を再び文節化して、分析的に語らなければならない。つまり、私たちは一方で「ある」の核心を成す意味を求めながら、他方で、その意味の理解については多くを語らなければならない。この相反する方向を同時に辿ることなど果たしてできるのだろうか。その困難を避ける最善の方法は、沈黙以外にはない。しかし、沈黙は哲学の採る道ではない。哲学が上昇の道と下降の道から成ること、これは既にプラトンが『国家』篇の中で語っていたことである。

「ある」を前にして沈黙するのではなく、かと言ってまた、「ある」を「ある」として呪文や題目のように唱えるのでもなく、「ある」について適切な仕方で語ること、これはいかにして可能なのだろうか。そこではもはや語るのではなく、歌うことを学ぶべきなのだろうか。(Singe! sprich nicht mehr!) 「ある」の不思議、「ある」の神秘に触れて、哲学は文学に席を譲るべきなのだろうか。

#### (4) 終わり、そして始まり

「ある」について理解するとはどうすることなのか、これに対しては、通常理解の在り方からする限り当然のことであるが、十分な手掛かりは得られない。では、どう理解すればよいのかわからない「ある」については、問うことそのものを止めるべきなのだろうか。否である。なぜなら、私たちはまだ、なぜ「ある」が哲学において問われるのか、その理由を理解していないからである。ここで私たちは振り出しに戻る。しかし、ただ空しく帰るのではない。予備的な考察を試みた私たちは、そこにさまざまな問いがあるのを見出す。

- ・「ある」はなぜ問われるのか。
- ・「ある」を探究するには、どのような道が開かれているのか。
- ・「ある」への問いに、これまでの哲学者はどのように答えてきたのか。
- ・「ある」についてのこれまでの理解は、何をどのように明らかにしたのか。
- ・「ある」についてのこれまでの理解が不十分であるとすれば、それは何か。

・「ある」について理解する、つまりその意味とは何か。

少なくともこれらの問いに明確に答えない限り、「ある」への問いがどんなに重要だと力説してみても、あるいは、過去の哲学者の文句をいかに権威として引用してみても、探究は空転していることになるだろう。